

## 二上キャンパスの輝き、永遠に

—記念誌の発刊に当たって—

高岡短期大学長 西頭徳三



昭和39(1964)年5月、富山大学評議会(大学における最高意思決定機関)は、ひとつの決議を行った。この決定が地元の各界を巻き込む一大運動に発展するとは誰もが予想しなかったに違いない。わが国は、東京オリンピック開催を目前にして、活気満ち溢れていた頃の出来事である。四十年も前のことである。

決議の内容は、富山大学工学部を高岡市中川から富山市五福に移すというものであった。戦後発足した新制・国立大学は、各地の既存高等教育機関を母体にし、いわゆる「タコ足大学」が多かった。そのため、大学本部キャンパスへの学部移転・集中の動きが急であった。富山大学工学部も大正末期設立の高岡高等商業学校を母体としており、この決議は、北陸の中核都市・高岡市が唯一の高等教育機関を失うことを意味していた。

高岡短期大学の歴史には、大きく三つの画期があると思う。すでに述べた、昭和39年5月の富山大学評議会の移転決議が第一の画期である。第二のそれは、昭和58(1983)年10月1日の地元の熱意が結実した高岡短期大学の開学である。そして、第三の画期は、平成15(2003)年5月の富山県内国立三大学の再編・統合の合意である。この間の詳細な歴史については、記念誌(第1分冊回想編)の記述に譲らざるを得ないが、ここでどうしても、第三の画期を開かれた蠟山昌一学長のことに触れておきたい。

蠟山昌一先生は、平成10(1999)年4月1日、本学の第三代学長に就任された。その頃は、国立大学の改革期に当たり、先生は、本学と富山大学、富山医科薬科大学との統合・再編問題で強力なリーダーシップを発揮された。ところが、新大学の発足を待たずして、ご病気のため急逝された。残念でならない。新・富山大学は、蠟山学長の先見の明なくしてはとうてい実現し得なかったに違いない。

平成17(2005)年10月1日、高岡短期大学は創立22周年を迎える。この間、本学は高岡市の歴史的文化的な伝統に支えられ、経済的な環境に育まれながら、約四千名もの人材を地域社会に送り出した。

このような教育・研究成果を挙げ得たのは、本学の設立、それ以降の大学運営にご協力を賜った、県・市など地元関係者、本学の旧・現教職員、そして卒業生・後援会の皆様のお陰である。特に、記念誌の発刊に当たり、ご多忙の中で古い記憶を活写して戴いた執筆者の皆様に厚くお礼を申し上げたい。

二上キャンパスの輝き、永遠たることを祈念して。